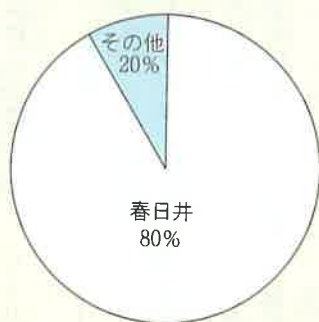


# 特集

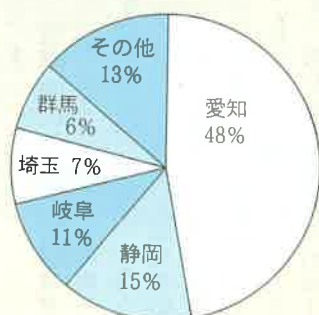
## これが春日井の日本一

サボテンの実生栽培 全国シェア80%

サボテンの実生苗  
生産割合



サボテン鉢植え  
出荷量



我が市にもある堂々の日本一。全国の市場に出回るサボテンの8割以上が、春日井生まれなのです。

形もユニークなら種類も豊富で、姿に似合わぬきれいな花を咲かせるサボテン、ちょっとしたインテリアとして、静かなブームになっています。

そんなサボテンが、なぜ春日井で…。その実態に迫ってみました。

### 全国に出荷される 春日井生まれの実生(みしよう)サボテン

全国各地で行われているサボテン栽培は、生産過程を分業で行っている農家が大半で、種から苗に育てる実生(みしよう)栽培と、苗として成長させる中苗(2〜3年もの)・大苗(4年以上もの)生産、各種の苗を鉢植えにして市場へ出す卸し販売とに大別されます。

市内のサボテン生産は、桃山町地区で、実生栽培を中心に行っています。

全国の実生生産の80%以上は、ここで育てられたものです。

最近の市場の傾向は、90年に大阪で開かれた「花と緑の博覧会」以後、静かなブームで、2〜4年ものを主体にした鉢植えが人気商品となっています。

全国の鉢植えの出荷量をみても、愛知県は約50%のシェアで、全国各地に出荷されています。







春日井のサボテン いま・むかし

# なぜ、春日井がサボテンの産地に？

市内で初めて、サボテン栽培を本格的に始めた伊藤龍次さん(桃山町)にお話を伺いました。

始めたきっかけは…

趣味でサボテンを栽培していた人が偶然訪ねたときに、初めてサボテンを見せてもらって興味を持ちました。当時は、リンゴや柿など果樹を主体

にした専門農家でしたが、副業でサボテンの栽培ができないかと考えたのがきっかけでした。ひとりで始めたのですか… サボテンに興味を持ったことを近く



の関戸貫一さんに話したら、共鳴してくれて、一緒に小牧のサボテン園を訪ねました。

そこで、育て方を聞いて、種を分けしてもらってきたのが最初です。当時サボテンは普及していませんでしたか…

当時は、希少なもので、趣味の園芸家が種から栽培していた程度で、親になるサボテンも高価でした。そこで、将来を見越して、人のやらないことをやってみようと考えた訳です。

最初の種からは芽が出ましたか…

当時教わった栽培方法は、素焼きの鉢と木曾川の砂を消毒して、そこにアルコールで消毒した種をまくという方法でした。まるで、はれものに触るかのようにして育てたら、芽が出ましてね。それはうれしかったですよ。

それからが試行錯誤の繰り返しでしたね。少しでも効率的に、大量生産できないかと、関戸さんと2人でいろいろな方法を試してみました。リンゴからサボテンに切り替えたのは…

昭和34年の伊勢湾台風で、リンゴの木がほとんど倒れてしまったことと、サボテンの栽培にめどが立ってきた、リンゴより収入になったことが、思い切って転換するきっかけになりました。



それから1年ほどたって、やっと軌道に乗りかけました。

その後、飛躍的に伸びたのはなぜ…

当時の日本では、サボテンの実生栽培の大量生産に成功した人がいなくて、それぞれでいろんな方法を試していました。ところが、関戸さんが、消毒せずに大量生産することに成功したんですね。これは、画期的なことでした。折しも、昭和40年ごろからの第1次サボテンブームで一気に軌道に乗り、

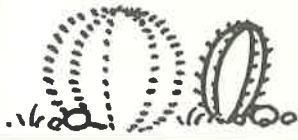
近所の農家が育苗の委託を始めるなど、市内のあちこちで生産する農家が増えて、サボテンの一大産地になりました。全国から、卸し業者や育苗農家がサボテンを買いにやってきました。実生栽培の技術は、いまだにここだけのもの、国内の生産のほとんどをまかなっています。

なぜ、ほかでは実生栽培ができないのでしょうか…

実生栽培には、お手本がありません。何百種類というサボテンは、それぞれに種をまく時期だとか、注意すべきところが違います。それは、長年の経験が必要としますので、ほかの地域ではやろうとしません。それよりも、分業制にして、出荷した方がお互いに効率的なんです。

合育

昭和40年代の第1次サボテンブーム



# 静かなブームを支える 13軒の生産者たち



春日井サポテン組合  
組合長 田中 博育

昭和40年代の第1次サポテンブームのころには、この地区の栽培農家は約50軒ありましたが、今では13軒になっています。それは、昭和45年から昭和57年まで、ブームが下火になったことで、栽培をやめる農家が増えたためです。しかし、昭和58年から再び、小さなサポテンにインテリアとして人気が出始め、昭和63年ごろから第2次サポテンブームとなつて、現在も実生苗は好調な出荷を続けています。

この地区のサポテン農家は3種類あります。実生苗をつくる第1次生産農家、その苗を育てる第2次生産農家、サポテンを鉢植えにして市場へ出荷する第3次生産農家の3つです。特に、実生苗の生産には、第2次生産農家との連携がなければ成り立ちません。

将来のことを考えると、ここでも後継者の問題は、深刻なものがあります。何とかして、サポテンの産地として、発展をさせていきたいですね。



昭和40年代の第1次サポテンブームのころには、この地区の栽培農家は約50軒ありましたが、今では13軒になっています。それは、昭和45年から昭和57年まで、ブームが下火

## 第2次生産農家



## 第1次生産農家



## 分業で成り立つ 生産体制

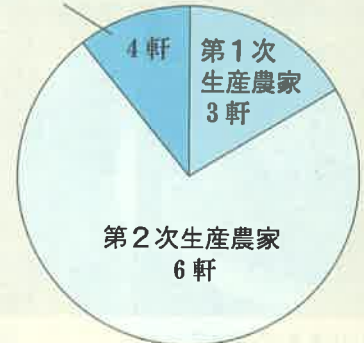
第1次生産農家(実生づくり)

第2次生産農家(育苗)

第3次生産農家(商品化)

### 桃山地区生産農家の内訳

第3次生産農家



## 第3次生産農家



④ 全国の産地

⑤ 全国の市場へ







春日井のサボテン いま・むかし

# 全国のサボテンは こうして生まれる

どのようにして、実生づくりは  
行われるのでしょうか  
サボテンの採種から苗になる  
過程を紹介します

## 1 「交配」



同じサボテンの花同士では交配しないので、綿棒を使って  
ほかのサボテンの花と交配させ、種をとります。

## 2 「種まき」



1箱に約2,000粒の種をまく、種類によって約1週間から  
2週間で発芽します。

### 実生サボテンの出荷まで

(6月にまいた場合)

#### 第1次生産農家

3月(交配) 4月(採種) 6月(種まき)

#### 第2次生産農家

12月(植え替え)

育苗農家へ

#### 第1次生産農家

6月(植え替え)

12月(出荷)

## サボテンの種類

サボテンは、原産地が南北アメリ  
リカ大陸の熱帯乾燥地帯で、我が  
国へは約300年前にオランダ船によ  
つてもたらされたといわれています。

サボテンは、234属3000種を  
超える種類があり、学問上では“木  
の葉サボテン”“ウチワサボテン”  
“柱サボテン”の3つに大別され  
ます。

市内の農家で栽培している品種  
は、約200種もあります。  
その代表的なものを紹介します。



霧楼丸 (きりずみまる)



金鯨 (きんしゃち)



春日井のサボテン いま・むかし

## 4 「再移植」



種をまいてから約1年後、2回目の移植をして1箱500本を80~50本にする。



静岡、群馬  
長野、岐阜  
のサボテン  
農家へ

宮崎  
サボテン園

春日井

伊豆シャボテン公園

## 3 「移植」



種をまいてから約6か月後に1回目の移植（1箱2,000本を500本に）して、第2次生産農家へ委託する。

## 5 「出荷」



第2次生産農家で約1年間育てた後に、第1次生産農家にもどされて全国の産地へ出荷される。



緋花玉 (ひかだま)



猩々丸 (しょうじょうまる)



高砂 (たかさご)